

| | |
|------------------|---|
| Title | 童貞文学試論 |
| Sub Title | Virgin boys in literature |
| Author | 許, 光俊(Huh, Kwang Joon) |
| Publisher | 慶應義塾大学法学研究会 |
| Publication year | 2017 |
| Jtitle | 教養論叢 (Kyoyo-ronso). No.138 (2017. 2) ,p.87- 108 |
| Abstract | |
| Notes | エッセイ |
| Genre | Departmental Bulletin Paper |
| URL | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00062752-00000138-0087 |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

エッセイ

童貞文学試論

許 光 俊

あるひとつの概念やイメージやキーワードによって、文学作品がまったく別のものに、たとえば大げさに過ぎるかもしれないにせよ、はなはだ異なった印象のもとに見えてくることがある。

私はあるとき、「童貞」が、そういった鍵のひとつではないかと思いついた。

端的に言って、「童貞」という語、あるいはそれが喚起するイメージや連想によって、すっかり親しんでいるはずの文学作品が、意外なものとして、しばしば妙に生々しくグロテスクな姿で見えてくることに気づいたのだった。むろん、すべての人生や文学とはグロテスクであると見なすならそれはそうに違いないけれど、そこまで理屈を進めなくても、さしあたってよく知られた、つまりはかなりの程度、かなりの広さで問題意識や価値が共有されていると思われる、いわゆる名作と呼ばれる小説が、童貞というフィルターを通して眺めてみると、刷新されるのである。

童貞とは何か

しかし、まずはその童貞なるものが何かを多少考えてみる。童貞とは性体験の有無を問題にした概念である。今更、その概念をあれこれいじくりまわしてみるのも野暮な気がしなくはないが、まったくしないわけにはいかない。この語は元来は男女両方に用いられるが、現代の一般的な用法では男性のみに関し

て使われるのが一般的であろう。私が想定しているのも、この男性のみに関して使われる場合である。

しかしながら改めて考えてみるに、この童貞という概念はそう単純なものではない。たとえば童貞とは異性愛についてのみ成り立つものか。同性愛者の男性が、仮にその道の手練れであってただし女性との経験を持たない場合、これは童貞と呼ばれるべきなのだろうか。もし、男性同性愛者が、女性との性行為を経験しているにもかかわらず、男性相手は未経験の場合はどうなるのだろうか。さらに具体的に考えるならば、受け身の立場でのみ男性経験をしている男性同性愛者は、童貞なのだろうか。

それとも、このような疑問はそもそもナンセンスで、童貞という概念は、同性愛を念頭に置かないのだろうか。ということは、童貞は、生殖から切り離せない概念であり、密かなうちに家族や家庭や家制度への言及を含むものであろうか。とするなら、童貞という概念は、非常に個人的で単純なことを指示しているようでいて、その実、社会システムと不可避的に関わらざるを得ないのだろうか。

こうした問いを立てたり考えたりするのは楽しいが、きりが無い。童貞とは、女性経験がない男性という程度にとどめておいて、さしあたって試論を始めるのに不都合は起きまい。私が童貞という語で示そうとしているのは、ごく常識的なこの語の使い方の範囲に収まる。すなわち、異性愛の傾向を持ち、いまだ女性との経験を果たしていない男性や状態のことである。社会的な意味合いが含まれるかもしれないが、とりあえずはそれについては深入りしない。

もとより今私が相手にしているのは世俗的な語であって、学問上の専門用語ではない。もちろん文学とは、厳しく意味を規定した専門用語によって構成されるものではない、広くまた曖昧に使われる言葉を組み立てていってなにかしかならを作りに上げることである。

それに、ヴァイトゲンシュタインが気づいたように、人は、たとえそれが日本語だの英語だのと呼ばれるものであっても、つまるところ自分個人の言語を使っているという側面も言語現象にはある。半世紀前の東京人にとっては、あるいは電車の中で私の隣に立っている現代の若者にとっては、童貞という語が喚

起するもろもろは、年齢が50代に達した私を感じるものとはいくらか異なった可能性は大いにある。それを歴史主義的に解明していくのも興味深く、意味のあることではあるが、しかしあるところで個人の壁を前にして行き詰まってしまうこともまた自明である。真摯な研究は、真摯であればあるほどそうなるしかない。その真摯が妄想や思い込みに転じない保証は何もない。

だが、前置きめいた部分はこの程度で切り上げよう。

童貞は肉体の問題か

話を童貞に引き戻すと、童貞は性体験の有無に関わる、考えようによってはずいぶんと単純で明快な概念であるように思われる。しかし、その性体験とは男性器の女性器への挿入を指して言うのか。それとも生殖行為である以上、射精を必須の条件とするのか。だがそれなら、生殖のためではなくたとえば快楽や金銭のために行われる性行為の場合はどう考えればよいのだろうか。

おそらく生殖という観点はそれほど重視しなくてもよいということになる。では、避妊具の使用は童貞であるかどうかとは関係するのだろうか。通常の性交で避妊具を用いても、それは常識的には性交と見なされるに違いない。けれども、もし身体をぴったりと包み込むような薄い膜のような衣服を着た男女がいたとして、彼らが互いの皮膚にじかに触れることがまったくないまま性交した場合、それは性交なのだろうか。

さらには、いっそう簡単ではない問いの可能性もある。たとえば、もしある童貞の男性が薬か何かによって深く眠り込んでいる間に性体験が行われた場合、それは童貞を喪失したことになるのか。医学的にそのようなことが可能なのは私の知らないところであるが、可能性としてはあり得るのではないか。

この問いを敷衍してみれば、次のような場合も考えられる。性行為を行ったことがあるものの、事故か病気などによってその記憶が完全に消失した場合、その男性は童貞なのだろうか。童貞という行為が、男性の身体に何か逆行できない現象を生じさせるならともかく、一般的には（一般的と言う理由は、あとに別の例を挙げるからだ）そうでない以上、彼が童貞かどうかは、自分にも他者に

も判別できないのではないかと。言い換えれば、童貞とは決定的に記憶の問題にならざるを得ないのではないかと。

さらに考えにくい状況かもしれないが、念のために示しておくとして、もし未経験にもかかわらず、自分は童貞ではないと心の底から信じ込んでいる人間がいた場合、それはすなわち偽の記憶や経験を持つ場合と言い換えられるだろうが、彼は童貞なのだろうか、それともそうではないのか。

さまざまな問いを立ててみたが、このように考えてみれば、童貞という語は、なるほど非常に明白な肉体的な事実から出発しつつも、実は精神的な概念であり、心理的な問題に一直線につながっていくことがわかる。

そして、これが肝心のところだが、童貞とは経験であり、経験である以上、記憶や理解や意識と無関係ではあり得ない。経験とは主観的なものである。たとえ女性との性行為を行ったことがあったとしても、もし病気か何かの理由でその記憶を完全に失っていたとしたら、あるいは自分が意識を失っている間に行われたとするのなら、彼は童貞と見なされるべきだろうと私は考える。

けれども、さらに問い続けるなら、もし彼が、いっさいの記憶を失っていたとしても、性行為によってしか感染しないとされる病気に罹患しており、そのことによって性経験を持っていると強く推測されるとしたら、それでもなお童貞と見なされるべきか……。この場合おそらく、肉体的には童貞ではなく、精神的には童貞であると、言い換えれば、科学的には童貞ではなく、文学的ないし人文科学的には童貞であると、あえて童貞概念を肉体的なものと同様のものにはっきり分裂させて対応する可能性ないし必要性が浮上してくることもあり得よう。

人は童貞になる

もし童貞が経験であり、ゆえに肉体的であると同時に精神的な事件だとするのなら、言い換えれば、童貞が言語的なものであり概念的であるとするならば、次のような問いも生まれる。童貞とは女性との性行為を行った経験があるかどうかの問題だという知識がなければ、つまるところ童貞という語が存在し

なかったら、彼は童貞であったり童貞を喪失したりできるのだろうか。それは樂園におけるアダムとイヴの在り方にも似ていないか。原罪以前・以後という考え方が、童貞にも当てはまるのではないか。

私たちは、幼稚園に通う男の子を、「彼は童貞である」と考えたりはしない。それは、彼が童貞であるのが当然だからである。私たちは彼を童貞と呼ぶことはなく、そしておそらくもしその男の子が「僕は童貞だ」と言った場合、この発言は意味をなさないであろう。言葉は、可能性を狭め、特定する機能を持つ。意味が形成されるとはそういうことである。人間しかない空間で「おまえは何だ?」「人間だ」というやりとりが意味をなさないのと同様、全員が童貞である幼稚園児の集団の中で、「彼は童貞である」「僕は童貞である」という文は意味をなさない。それはいかなる特徴も示さない。

ところで、もしこの幼稚園児を指して、十年後、二十年後には「童貞である」、あるいは「童貞ではない」と言うことができるようになるだろう。これは興味深いことだ。つまり、彼は、童貞と呼ばれない状態から、童貞と呼ばれるようになる、すなわち童貞になるということだ。そしていずれ機会があれば、童貞ではなくなる。幼稚園児の彼は、たとえば未童貞とも呼ばれはしない。童貞という概念が、彼に対しては意味がないので、未童貞という言い方も行われないのである。

「いや、それは論理的ではない。彼は幼稚園児のときも童貞だったが、それに対して、『彼は童貞である』という言葉が発せられなかっただけである」と反論はできるか。性交したことがあるかどうかは、そうした言葉が発せられるかどうかとは無関係のはずだからである。

しかしながら、社会的には、あるいは言語的にはそうではないのではないか。もちろん言語は社会的である。端的に言って、人は童貞ですらない状態から「童貞」になるのではないかと私は考えるのだ。

身体が成熟して性行為が可能状態になってもなお経験を持たないままであることが童貞だと言えば、あまりにも当たり前のように思える。が、もしある男性が、病気などの肉体的な理由によって、たとえば事故か何かで性器を失ったりして性行為が不可能な場合、彼は童貞にすらなれないのではないか。今私

は肉体的な理由と書いたが、精神的な理由においても同様に考えることができそうである。

あるいは社会的な理由があった場合はどうか。もし、世界がわずか数人を残して死滅したと仮定する。生き残ったのは、ひとりの童貞の少年と、彼の母や姉妹だけである。この少年は、近親相姦の禁忌を犯さないことには決して性行為を行うことができない。とするなら、彼はやはり童貞にもなれないとは考えられないか（許されるかどうかという道德や決まりの問題にはこれ以上は踏み込まない）。

あんなこんな考えをめぐらしてみた。ひとまず、精神が明晰であり、正しい記憶力を持ち、肉体的・精神的・社会的に性行為が可能でありながら、行為の経験を持たないが、この先その可能性があるという宙づり状態（にある者）を、童貞と呼ぶ、今はそうしておく。

文学と童貞

「青春の文学」という言い回しはある。そうした作品の大半は、おそらくは若い、より正確を期すなら、十代後半から二十代の年齢の登場人物たちが、物語の中心に置かれた作品だろう。執筆者は、それと同じか、年上であることが多いだろう。晩年の作家が「青春の文学」を書くことがあり得ないわけではないが、逆に少年少女が小説を書いたとして、それが自動的に「青春の文学」になるかどうかは疑わしい。太宰治の『晩年』は、まだ若い作家が出した短編集だが、通念的な意味での青春小説を狙ったわけではないし、またおのずとそうなったわけでもない。ただ、逆説的に青春小説だ、あるいは偽装的な青春小説だという読解は可能かもしれないが、それは私に言わせれば、一般的な読書とは異なるレベルでの専門家的読解になると思う。小説は、一般的な読書の水準と、専門家的な水準と、おおざっぱに言って、ふたつの読解の対象である。とはいえむろんのこと、どこからどこまでが一般的なのか、そのような質問にきっぱりとした答えを与えるのは難しい。

「青春の読書」という言い回しもある。若い、これもまた十代のたぶん中ほ

どから二十代にかけての読書を意味しよう。「青春の文学」が作品や著者の側からの概念であるとすれば、こちらは受容者の側からの概念である。

それらに対して、「童貞の文学」または「童貞文学」とは、少なくともあまり一般的とは思えない呼称である。しかし私は、こうした呼称を用いてみたい。

青春だの若いだのという概念の中に、童貞は含まれるのだろうか。含まれるに違いない。しかし、これらを童貞の文学だの童貞の読書だのと言い換えれば、それはまったく別のものを意味してしまうことになるだろう。

童貞でない青年はいるし、青年でない童貞もいる。性体験のない60歳の男性が主人公の小説は、童貞文学と呼べるのだろうか。呼べるだろう。童貞文学とは、青年の文学とは限らない。ただ、現実的には、青年でない童貞が、彼の童貞性によって物語を形成するほどの作品が、そう頻繁にあるものではないとは想像がつく。

また、若い童貞の主人公が活躍するからといって、それが童貞文学とわざわざ呼ばれる必要がない場合もあり得る。ことに少年たちが主人公の作品が、おのずと童貞文学になろうはずがない。

非童貞の童貞文学

ある程度名の通った小説家や詩人のほとんどはもはや童貞ではあるまい。しかし、彼らは童貞を主人公にした作品を書く。これは案外肝心なことなのかもしれない。すなわち、童貞文学とは、もはや童貞ではない者が、意識的であろうとなかろうと童貞時代を振り返って書く、すなわち現在ではなく、過去を書くという隠れた一面があるのではないか。

端的にこの構図を示している例として、田中英光の『オリンポスの果実』が挙げられると思う。この作品は、すでに妻子を持つ語り手が、恋が恋であることも理解できないほど若かった時分に好きになった女に対して書かれた手紙という体裁を取る。語り手は当然、童貞ではないが、にもかかわらず全編は濃厚な童貞性で覆われている（今私は童貞性という語を用いてみたが、童貞の特徴を童貞

性と呼ぶのは構わないだろう)。語られている事件が童貞時代のこととはいえ、このような書き方は十分あり得るのである。

実は、この小説は二重の童貞性によって成り立っている作品である。この小説を書いたとき、作家は童貞ではなかったと思われる。その作家が、もはや童貞ではない語り手を用意し、その語り手が自分の童貞を語るなのである。この小説の真髄は、初々しいあるいは幼稚な若者のきわめて童貞的な心理を綿密に写し取っていることに限らない。最後の衝撃的な一行によって、たった今の、妻子がいて童貞であるはずもない語り手が、再び深い童貞性へと連れ戻されてしまう点にこそこの小説のまったく意外なおもしろさがある。作品全体は、甘美な懐古の色を帯びている。今、語り手は戦場において、遠くない日、命を落とすことになるだろう。その彼が、回想することによって甘美な童貞の記憶を生き直す。それはほとんど、再び童貞になることのようにすらある。

このような作品を見れば、「童貞」は、第一に性体験の有無に関連するけれど、では、性体験があれば童貞ではないのかと問えば、もはや童貞ではないが、しばしば童貞性は残っていると答えるべきだ。突き詰めれば、童貞性とは、童貞であることと無関係ですらあり得ると言うしかないのである。

女より機械

ところで、私がこんなことを考え始めた理由のひとつは、夏目漱石の『坊ちゃん』が、以前からどうにも薄気味悪い物語の気がして仕方がなかったのである。若くて奔放な教師の活躍を描いた愉快的な物語と一般的には見なされているこの小説は、私にはまったくユーモラスでもなければ愉快でもない、むしろ憂鬱を誘うものとしか感じられないのである。作品の中にことさら笑いを見出したがる傾向は、特に1960年代以後顕著のようで、それはそれで意味がないことではなかっただろうが、笑いを見つけた（ように錯覚する）だけで作品がわかった気になってよいはずもないのである。『坊ちゃん』に、一般的な価値観がひっくり返されるカーニヴァルの側面があるのは事実としてもである。

もし私がこの作品を要約するなら、『坊ちゃん』とは、「自らの童貞性を意識

せぬ童貞が、その童貞性を全開にし、暴発的な行為を繰り返したあげく、童貞であることが無条件に許される老婆のもとへ帰還するという話」とでもするだろう。

彼はたまたま教師という職に就いたが、生徒たちと親しく交わることが全然できない。同僚とうまくやっていくこともできない。常にすれ違うだけである。彼は、周囲の誰とも正しいコミュニケーションができない。むろん作家は、こうした日常的な人間関係の中に、性的な交わりの隠喩など仕込んだわけでもあるまい。しかし、私には坊ちゃんの行動は、男女関係の比喩と受け取っても構わないように思われる。いわゆる主人公の活躍なるものは、女との性行為が上手にできず、不機嫌になり、自分の至らなさは棚に上げて、この女はおかしい、あげく悪いのは相手だと腹を立てている童貞のように感じられるのである。端的に言って、彼の「活躍」とやらは、精神的にも肉体的にも暴発以外の何物でもない。

また、坊ちゃんが、赤シャツらに激しい敵意や憎悪を抱いている理由はいくつもあるけれども、ひとつには彼らが、女がいる店に頻繁に出入りしているからである。それが坊ちゃんには不潔に感じられて仕方がないのである。それを童貞らしい潔癖感と言っても、そうは違うまい。さらに、坊ちゃんが、自分の感情や行動を、正義と同一視するところがまた童貞くさいのである。しかも、彼の正義感なるものは、反省や志向を欠いたひどく薄っぺらなものにすぎない。言い訳が多いのも童貞くさい。

四国の学校を去った坊ちゃんは、人間（の女）を相手にするつもりも欲も義務感もなく、「街鉄の技手」、つまり機械を相手にしていればよい仕事に就く（ミシェル・カルージュの『独身者と機械』という書物が思い起こされる）。この結末まで読んでようやく、「坊ちゃん」という語が、月並みな坊ちゃんという意味を超えて、童貞すなわち他人との決定的な結びつきを持ったことがない者を指す語に変容していることがわかるのである。いずれにしても、他人を拒み、自分も他人に拒まれるという物語が、どうして愉快なものとして認知されているのか、私にはとうてい理解できない。

老婆の清との間はうまくいっているようだが、実はふたりの間には言語によ

る正しい交流はないのだ。坊ちゃんは清の発言の内容に繰り返し違和感を覚え、しばしば理解不能だと感じるが、しかし彼女が善い人間であって、自分に愛情を抱いていることを知っている。だから、ふたりの関係が壊れないのである。

言語とはつまるところ他者性の確認にほかならない。清と坊ちゃんの間には、ごく普通の、生活者としての言葉が行き交っているに違いないが、清の言葉はしばしば坊ちゃんには正面から受け取ってもらえないがゆえに、言葉としての本質を失っている。だから、ふたりの間には、関係を壊してしまうであろうような強い他者性が立ち現れてこない。その代わりに、言語が無効であるようなぬくぬくほんやりした平和がある。そのような人間関係や平和は確かにあり得るだろう。

言語を介しながら、しかし言語の内容に拠らないコミュニケーション、それは母親と胎児のような関係なのかもしれない。母親は胎児に一方的に語りかけるのみである。おそらく胎児はその内容を理解できないだろうが、にもかかわらず何か、つまり愛情を感じるだろう。清と坊ちゃんの関係は、それに似ている。胎外に出た赤ちゃん＝坊ちゃんは、必ずしも好意的とは限らない外界とのさまざまな摩擦や衝突を繰り返す。そのたびに、彼は清を思い出す。願っても果たされない、しょせん壊されるしかない胎内回帰願望であり、たとえ一時的に満たされたとして、いかにも儂い。そして、この胎内回帰願望がある限り、坊ちゃんは童貞性を保ち続け、また実際に童貞であり続けるほかならう。

坊ちゃんは父親や兄と仲がよくなかったが、それはふたりが、家父長的な社会のシステムに完全に順応しており、マッチョ的だからである。このふたりによって坊ちゃんは去勢されているとすら言ってよいのかもしれない。

むろんのこと、坊ちゃんは孤独なのである。夏目漱石が食えない人間で、狡猾な作家だと私が信じるのは、孤独で救いようがない坊ちゃんの行動を、一見痛快なものとして描き、読者に見当違いの楽しさを与えているからにほかならない。

童貞と異邦人

私には、『坊ちゃん』は、アルベール・カミュの『異邦人』にも似た、コミュニケーションの不可能性の物語にしか見えない。『異邦人』の主人公を、形にとらわれない奔放な主人公と形容する人は、皆無に違いない。にもかかわらず、『坊ちゃん』ではそのようなとんでもない読解がまかり通っている。

これら2作品を対比させるのは、興味深い作業である。『異邦人』の主人公が、太陽のせいでも人を射殺したというエピソードと、坊ちゃんが、たまたま見かけたから理科系の大学に入ることにしたというエピソードは、めちゃくちゃなようでいて、どちらも非常にリアルである。リアルと私が言う意味は、世界とはこのような、あらかじめ想像できないことが、恐ろしく容易に起きてしまうような場所であるということがはっきり示されているという意味である。ついでながら、スタンダールの『赤と黒』で、ジュリアン・ソレルが突然ピストルを撃つ箇所にも、私はすさまじいリアリティを感じる。ただし、このようなことを、社会は一般にめちゃくちゃだの突発的だの衝動的だのと呼んで、受け入れようとはしない。社会が好むのは、こうなったからあんなったという、想像ができる変化である。しかし、それは人間が一方向的に世界に期待する物語でしかなく、『異邦人』の主人公はそのような物語的な世界理解の外に住んでいる。彼らは、社会を成り立たせるためのフィクションを共有しないのである。

坊ちゃんも本質的には異邦人であるが、それは彼の童貞性と決定的に重なっている。そこに、『坊ちゃん』のそう言ってみなければおもしろさと滑稽さ、私に言わせれば悲哀と救いのなさがあるのである。童貞は、やがてそれを喪失するという前提において社会に認知されているものではないか。それはすなわち、家制度をはるかに超え、人類としての繁殖・繁栄のシステムの一段階として位置づけられるということの意味する。しかしながら、坊ちゃんには、はなからこのシステムに参加する、ないし吸収されるつもりがいっさいない。彼の童貞性は、童貞喪失の前段階ではなく、彼の本質そのものなのだ。坊ちゃんの暴力性は、究極的にはここにある。

ただし、彼がカミュが描いた異邦人とはまったく異なることも否定できな

い。『異邦人』の主人公ムルソーは、それまで彼が漠然と信じていた、大学へ行って、優良な企業に入り、出世をするという、社会で共有されている価値観を信じなくなったときに、社会的な約束事や習慣に意味はないと理解したと説明している。つまり、彼は、何事かを経験することによって異邦人になったのであり、またそのことを自覚している。坊ちゃんが本質的に内省を欠いているのとは対照的だ。言い換えれば、ムルソーはもともと異邦人ではなかったのに、異邦人になったのだ。自分を異邦人と意識した異邦人は、童貞的ではあり得ないのである。ムルソーには童貞的な様子がないが、それは彼が十分に女性経験を持つからではおそろくない。

監獄に収容されたムルソーが死刑を待つ間、訪れてきた神父を罵倒する終わり近くのシーンも、童貞という視点から解釈することができる。童貞ではないムルソーは、童貞であろう、また童貞であり続けることを公に誓った神父に対して激しい軽蔑を感じる。神父が語る言葉や神や救いは、薄っぺらで、つまらぬ抽象論でしかない。まさしく童貞が夢想する女のようなものなのだ。それがムルソーには我慢ならないのだ。ムルソーにとって世界は、明るい太陽の光のもとでくっきりと見えるそれそのものである。彼はこの世界を理解するためにいかなる観念も物語も必要としない。世界はまさに今このようなものとして目の前にあるし、それ以外ではあり得ない。その彼にとって、神父が口にする言葉のいちいち、童貞のたわごとにも等しく、苛立たしい。

しかしながら、社会はこの場合、ムルソーと神父のどちらに好意的かと言えば、もちろん神父に対してである。神父は、童貞であることが社会的な属性であり、社会の中でしかるべき位置を与えられている。童貞が公認される空間があるのだ。この童貞神父は、社会を強化するために役立つのである。

とはいえ、神父のような例を別にすれば、一般論として次のようには言えるだろう。異邦人は童貞とは限らないが、童貞は異邦人である、と。坊ちゃんは、経験しないがゆえに、あるいは事件に遭遇してもそれを経験として理解し、消化できないために、異邦人であり続けるしかないのである。経験に代わり得るものは、知識や学習である。ところが、坊ちゃんは知識や学習を軽蔑している。それでは、なおのこと異邦人であるほか道はない。

私は想像してみる。ヘーゲルが、東洋のとある国では、こうした小説が大いに喜ばれ、推奨され、学校で子供らが読まされていると知ったら、いかなる反応をするであろうか。弁証法を微塵もわかろうとしない野蛮な国と思うであろうか。坊ちゃんと外界の間には、いつまで経っても乗り越えがたい壁があるだけである。坊ちゃんの精神は成長を知らない。『精神現象学』の著者は、坊ちゃんのような人生を最大限に軽蔑するだろう。

童貞と暴力

坊ちゃんが、温泉の大きな湯船で泳いだところを生徒に目撃されて笑われるという広く知られているエピソードは、示唆的である。湯船は、浸かるためのものであるという社会的なコードがある。ところが、坊ちゃんはそのコードから逸脱する。というより、おそらく彼はそのコードを共有していない。湯船を泳ぐために使用することは、たとえ他に人がいなくて迷惑にならない場合でも、大人がすればみっともなく、はしたない、笑われるべき行為である。衛生の点などにおいて明快で合理的な理由があるわけではない。だめだからだめというだけである。しかしながら、このだめだからだめであることが坊ちゃんには理解されない。だから彼は異邦人なのである。彼が浴槽で泳ぐのは、太陽のせいの人を殺したというムルソーの言葉と正確に対応していると私は思う。ただ、一方は笑われるだけですみ、もう一方は怒りを買って死刑を言い渡されるという違いはあるにしてもである。

殺人が暴力であることはまず自明だとしても、自分を満足させるために社会的なコードを逸脱することが暴力だと考えるなら、浴槽で泳ぐことも本質的には暴力の一種である。

童貞が小説の主人公として現れるとき、どうして彼にはしばしば凶暴性や禍々しさや不穏な気配がつきまとうのだろうか。理想主義的な、非暴力主義であるような武者小路実篤が何度も描いた青年たちですら、例外ではない。童貞とはすべからず、意識されないテロリストなのか。

童貞とは、あるいは童貞性とは、暴力性を必然的に内包しているのだろう

か。坊ちゃんが振りかざす正義の拳は、抑圧された彼の性衝動の表現なのか。

童貞喪失失敗者の死

ヘッセの『車輪の下』は、無理強いされた勉強のせいで心身を消耗し、結局は夢も希望も失って自滅した主人公を描いた小説だと一般的には理解されているようである。そう理解して大きな間違いをしているわけではなからうが、一面的で不十分だと思う。

私がこの小説を読み返すたびにいささか奇異な印象を受けるのは、主人公が学校を去ってからのあとの長さにはかならない。もし、学校教育の非人間性を糾弾するための小説なら、主人公は首をくくるなりしてしまえばよい。

作家の筆が案外丁寧に描いているのは、学校から家に戻った主人公にとって、故郷がもはやまったく違ったように見えてしまう様子である。より正確には、故郷の人間が、と言うべきであろう。川や魚といった自然は変わらないからである。楽園を追い出された主人公は、楽園に戻ってきたが、もはやそこは楽園ではない。つまるところこの小説の後半は、時間の不可逆性、失われた少年時代が取り戻せないことの当惑を描いていると見なせばほぼ尽きるのかもしれない。

ただし、それだけでは済まないのは、この小説が最後のほうに至って、突然、性の匂いを強く発散するようになるからである。もしかしたら、この少年は、女性との性体験を成功させれば、人生の新しい地平が開かれたのではないか。そう思わせるのである。

主人公ハンスは、小さな失恋を経て死に至る。その恋は、非常に精神的なものとは呼び難い。蓮っ葉な娘が、初心な少年と遊ぶつもりになり、彼を誘惑するが、彼にはそもそも娘の言葉や行動の意味がよくわからない。主人公を誘惑する娘には、どこかしら魔女的な色合いがあるが、主人公は彼女が魔女的であることに気づかないし、自分が誘惑されたことの正確な意味を理解しないままである。つまり、彼はむろん童貞なのだが、誘惑の意味を、すなわち童貞の意味に気づいていないようなのだ。彼は、まだ童貞にもなっていない段階にいる

のである。

それまで、この小説の中には生徒やら教師やら、もっぱら男しか登場しない。その最後近くになって、居酒屋やそこで浮かれる男女の姿を取って、初めてセクシュアリティが前景にせり上がってくる。『車輪の下』は、物語の終わりを前にして、学校小説とは呼び難い生々しい官能の色を帯びる。ところが、この官能の色は、読者にはこのうえなく鮮やかだが、主人公の目には映らない。

欲望のままにふるまう娘は、学校の規則や徒弟修業といった人工性に苦しめられている主人公と対比するまでもなく、いかにも自然的なニュアンスを持つ。が、この娘は、主人公を慰撫する川や野といった自然とは違う。彼女は自然の欲望に従っているようでいて、実はコケットリーを弄している。つまり、彼女は、性的な欲望というもっとも自然的な欲望を、コケットリーという人工性によって表現している。その点では、彼女の手練手管とは、社会的に様式化されたものであって、学校の規則、すなわち社会のコードと本質的に変わるところがない。それは、学校の規則と同様に、主人公を破滅へと導くほかない。奔放そうで自然の欲望に忠実であるように見える彼女だが、男を誘い、逢引きし、関係するという手順は、完全に社会的なものである。

いわばハンスは、童貞の牢獄に閉じ込められたまま、突然の死を迎える。それが自殺かどうかはわからないにしても、彼は、そもそも自分が童貞であることも知らないままに、死ぬようである。ハンスという賢い少年にとって、文字通り致命的だったのは、彼を取り囲む学校や社会や、それどころか男女関係までもが牢獄だと悟らなかつたことだった。もし彼が、武者小路の主人公のように、自分は女を知らない、自分は童貞であると、そして童貞とはこのようなものであると、少なくともそれだけでも自覚できたら、また異なった人生があり得ただろうに。

女に飢える童貞

『車輪の下』の主人公は、少年でありながら活発さに乏しく、頻繁に頭痛が

するような、ひ弱そうな少年である。思いがけず誘惑されるまで、彼には性欲らしい性欲もなかったように見える。また、誘惑されたあとでも、心理的には混乱させられながらも、それが肉欲という形で具体化することはなかったようである。それがゆえに、『車輪の下』の主人公はまぎれもなき童貞であるのに、また女との遭遇もあって落命するように見えるのに、これを童貞の文学とは呼びづらい。むしろこれは未童貞の文学とされるべきだろう。未童貞が童貞になる暇もなく、童貞をすっ飛ばして女性体験にたどり着く前に、死んでしまうのである。

それに比べ、武者小路実篤の『お目出たき人』は、徹底して童貞性を追求した作品である。童貞の主人公は女に飢えている。童貞らしい観念をたっぷり持ちつつ、肉体性も意識せざるを得ない青年である。この小説を読んでいると、童貞になってから童貞を喪失するまでが、一種のモラトリアム状態として機能していることに気づかされる。

彼は性欲を、たとえば娼婦を買うことによって満たそうとは微塵も考えない。というのも、女性との体験を持たないことは、彼にとっては、あるべきものが欠けている状態ではなく、誇るべき清潔さの証だからである。ならば、その清潔さを保つための自慰は許されるのか。この問題は、彼にとって容易に解決できるものではない。

この童貞青年はきわめて真面目である。その点にはいささかも疑いがない。が、その真面目さが薄気味悪さに通じているのもまた否定できない。その薄気味悪さはどこからくるかといえば、彼には他者がいないからである。彼の場合にも、童貞の道徳、童貞性の称揚は、みずからのうちで完結している。だとしたら、この童貞とは、みずから望まれたものであり、贅沢の一種だとも言えるに違いない。

主人公は、自らの世界観、遠近法、パースペクティブの中で生きている。というか、そこでしか生きていない。パースペクティブ？ そういえば、フリードリヒ・ニーチェもまた、いくら女を買ったところで、童貞臭い思想家だった。

『お目出たき人』の締めくくりは気味が悪い。主人公が恋い焦がれた女は、

たとえ言葉で何と言おうと、実は主人公を愛しているに違いないという妄想が綴られている。

この締めくくりは、ジョン・ファウルズの『コレクター』の最後にそっくりだ。童貞青年たちは、自分にとって都合のいい物語をでっちあげる。自分が善良だと信じて疑わない主人公が妄想する、最高に純粹で幸福な可能性。

童貞と処女が対決するとき

ファウルズの『コレクター』は、ひとことで言ってしまえば、童貞と処女がすれ違い続ける物語である。この長編小説には、階級の問題や、芸術の問題や、さまざまな要素が取り込まれている。それをすべて無視してよいと考えるわけではないが、物語の一番の根っこにあるのは、童貞と処女の、決して止揚されることがない対決である。

たまたまくじを当てて大金を得た青年は、かねてから気に入っていた美術学生ミランダを誘拐し、地下室に閉じ込める。内向的で、蝶のコレクションを趣味とする彼には、生命の多彩さや変化がまったく理解できない。もっと言うなら、自分と異なる他者が存在することを受け入れられないし、我慢できない。彼の判断力の基礎になっているのは、安っぽい世間常識以上のものではないが、彼はそうした俗流から抜け出す可能性を予感すらできない。彼よりも知的なミランダは、やすやすとそれを見抜く。

青年は、エロティックな欲望をまったく持たないわけではない。猥褻な絵や写真は、彼の関心を強く惹くのである。いわば、彼は、本物の女を知る代わりに、女についての概念だけを持っており、しかもそれが概念に過ぎないことには気づいていない。

娘は、もしこの不幸な男と自分が、当たり前な男女関係になれば、彼は生まれ変わって、自分を解放してくれるのではないかと考える。そして、彼を本当には愛していないにもかかわらず、彼との肉体的な結びつきを試みる。ところが、青年にとって、こうした行為は汚らしいものである。労働者階級である彼よりもさらに下の、娼婦のような女たちが行うことである。

自分よりも知的にも階級的にも上であるがゆえに崇拜し恐れを抱いていたミランダが、実は娼婦と変わりがないと青年は確信し、彼女に猥褻な写真のモデルとなるように強要する。つまり、他者の存在に我慢がならない青年にとって、それでも娘は否定ができない絶対的な他者として目の前にいたのであるが、今やまったく取るに足りない物同然に成り下がったのである。頑固な童貞は、他者性に我慢がならない。それどころか他者性を排除することに喜びを覚えるのだ。童貞の支配欲を侮ってはならない。振り返ってみれば、坊ちゃんにしても、腕力に頼むところがなかったか。そこには、自らの善を信じることで、力や支配への傾斜を隠す一面が必ずしもないわけではないだろう。

ファウルズとは対照的に、『お目出たき人』で武者小路が描いた童貞青年は、働かなくても生活できる有産階級に属し、自分よりも下の社会階層の女を求める。彼には、女とは、妻とはこうであってほしいという確固たる理想像がある。社会的に優位である彼の理想像は、無条件に正しいはずだ。自分の求愛は、目をかけられた娘にとっては、神の恩寵のようなものだ。それを彼は疑わない。進歩的な社会や正義に憧れ、西洋をよく勉強する青年は、だがその実、古臭い男尊女卑からただの一步も足を踏み出していない。

ところが、ファウルズが示したイギリスの童貞青年は、働かなくては暮らしていけない、これといった才能や可能性など持っていない若者である。彼は、自分の気に入った娘が、自分よりも上のクラスに属していることを知っており、だからミランダに対して少なからず恐怖を感じたわけだが、彼女が下手なコケットリーによって娼婦に転落したことは、彼にとっては思いがけず生じた痛快なできごとであり、かえって自信をつけてしまうのである。童貞の妙な自信や誇りや傲慢と、それと相反するような弱気をファウルズ以上に巧みに示した作家はそうはいまい。

『コレクター』という作品名は、適切であって適切でない微妙さを持つ。コレクターとは、物事を収集することにもっとも大きな関心と熱意を抱く人間である。確かに、『コレクター』の主人公はたくさんの蝶の標本を持っているが、さまざまな女性のコレクションを作ろうとしているわけではない。彼はミランダという娘にひかれただけのことである。グロテスクな恋であり、ミランダか

らすれば頭がおかしいとしか思えない愛ではあるが、ひとりの男がひとりの女に憧れるという点では、恋であることは否定できない。コレクションにされた蝶とは、一方的に生命を奪われ、コレクターの価値観によって一方的に意味づけされた存在である。このような一方向の関係が、確かに『コレクター』のふたりの関係ではある。

ミランダを失った青年が、これから新しい女を探しに行くところで物語は閉じられる。この救いのなさば、信念がある童貞ならではものなのか。武者小路作品の童貞も、失恋しようが友人を失おうが、つまるところ何も変わらないことを思い出させる。童貞が自分の純潔を誇る時、そこには気味の悪い信念がつきまとう。

童貞ではない童貞

小説からは話が逸れるけれど、増村保造が監督した『盲獣』は、さまざまな点で『コレクター』と非常に似通った映画である。『盲獣』の主人公は、たまたま父親の畑が高く売れたので大金を手にした盲人である。彼は、母親に大事に育てられたが、それ以外の女性とは縁がない。しかし、目が見えないがゆえに触覚が異常に敏感になった彼が心惹かれてやまないのは女体である。その彼が作る彫刻とは、すなわち彼が抱く女性のイメージにほかならない。

彼は、理想と思われるモデル女性を誘拐し、監禁する。女は男の本質、すなわち母親との濃密な関係を見抜き、童貞性を嘲弄する。

童貞の陰に母親あり。『坊ちゃん』では清が、何かにつけ坊ちゃんを擁護する擬似的な母親の役だったが、ここでは母親そのものが、頼りがいがある存在としてそこにいる。何しろ、この母親は、息子が企てる誘拐までも手伝う、とんでもない母親なのだ。

ところが、息子はとんだ偶然から母親を殺してしまう。パニック状態に陥った彼は、女を犯す。母を殺した彼は、自分を獣にも等しいと感じ、それゆえにあらゆる倫理を超えた者として、力だけを頼りにすることができるようになるのだ。

やがて女は男が住まっている暗黒の、だが繊細きわまりない触覚の世界を共用できるようになり、男と心中にも近い死を迎えることになる。

『コレクター』と異なるのは、むろん大いに暴力的で異常ではあるが、主人公が、無事に童貞を喪失している点である。そして、触覚、しまいには肉体的な苦痛を通じて、女との濃密なコミュニケーションを実現させるに至る点である。映画は、前半と後半に分けられる。前半は、『コレクター』的な、監禁と、そこから脱出しようとする行為を描写する。男の童貞喪失を境に、物語は一挙に後半に転じる。ここでは、時間は止まり、地獄のような楽園という矛盾的な幸福が描かれている。『お目出たき人』では、童貞とは自ら選んだ僧房のようなものである。『車輪の下』においては、意識されない牢獄である。が、『盲獣』においては、童貞性そのままに楽園が実現するのだ。ただし、この主人公は童貞ではなくなったが、では童貞性も喪失したかと言えば、そうではない。言うならば、彼は童貞ではない童貞である。

絶対童貞

ところで、『コレクター』の主人公は、不能のようである。そのことによって、女性との結びつきが不可能であるように定められている。それが、彼が女についての惨めな観念を握り締めたままである理由のひとつではあるだろう。この不能が克服可能なものかどうかは、明らかにされない。ただ、彼とミランダの間には、不可能性の闇のみがあった。

童貞の文学とは、言い換えれば、童貞が童貞を喪失できない文学のことである。では、童貞を喪失する作品はどのようなのだろうか。

童貞とは、肉体的な童貞には限らないのではないか。田中英光『オリンポスの果実』の主人公が、妻子がいるのに強い童貞性を免れないのは、彼にとってつまるところ本当の女とは、かつてオリンピックに向かう船の中で出会った娘に尽き、いくら妻との性交を重ねたところで、絶対的な童貞性は傷つきすらしなかったということではないか。

絶対的な童貞性？ 私は今、そう名付けてみたが、そういう概念を考えてみ

てもよいだろう。あるいは、絶対童貞と言ってもよろしい。一般的な童貞とは、女性との行為によって脱するものである。ところが、この絶対的な童貞性とは、肉体との関連は薄い。

『レ・ミゼラブル』などの翻訳で知られた豊島与志雄の『童貞』という短編は、ある少年が、商売女を相手にして童貞喪失した直後の心境を綴っている。その経験は、彼が期待したほどではなく、つまらないとまで言うしかないものだった。だが、たとえそうであっても、もちろんなにがしかではある。たとえば彼は、何も気づかない母親を愚鈍と感ずるようになる。

少年にとって初めての性交がつまらなかった理由ははっきりとは書かれていない。しかしながら、容易に推測できる。性交が、純粹的に肉体上のできごととして完結してしまっているからである。それは、多分あくびだかくしゃみだかのようにあっけないものだったのだ。

少年の相手をした女は、プロである。彼に気がありそうな様子を見せる。言うまでもなく、ただの演技である。その演技は、少年にすら見抜ける程度のものである。にもかかわらず、少年は、その演技の中にほんのわずかであっても真実が込められているのではないかと信じたくなる誘惑から逃れられない。彼の心の中では、女の言葉が無限に反芻される。

もしかしたら、これがきっかけで少年はありふれた売春婦の罠に落ちてしまうのかもしれない。だが、そのときこそ、つまらなかった最初の行為は、つまらないものではなくなるのである。それは、愛おしい女との最初の交わりとして、神聖なものにすら化けるだろう。行為は、少年の脳髓の中で実際とは違ったものに仕立て直され、神秘化され、象徴化され、価値を与えられるだろう。少年の心の中には、つまらなかった行為をそのように価値あるものにしたという気持ちが消し難く存在している。童貞喪失が期待していたほどおもしろくなかったのは、行為に何の心理的な必然性、またこう言ってもいいだろうが、物語性が欠けていたからである。

作家は、この短編に『童貞』という題名を与えた。一読すると、「童貞喪失」とでもしたほうがよさそうな内容であるにもかかわらず。しかしながら、主人公は、肉体的には童貞ではなくなったものの、まだ心理的には自分が童貞では

ないとは確信できないようである。『盲獣』とはまったく状況が異なるが、この少年もまた童貞でない童貞に分類されてよい。その意味で、この題名は十分にあり得る。

「しろくと童貞」という言葉は、案外、このような童貞の本質に届いているかもしれない。この言葉は、プロの女性が相手をする性関係しか経験がない男性を意味する。プロの女性が相手であっても、それは女性には違いないから、彼女との行為を経れば、童貞ではなくなるはずである。にもかかわらず、売春婦相手の経験しかない男がしばしばしろくと童貞という軽蔑的なニュアンスを帯びた言葉で呼ばれるのは、プロが相手というだけでは、童貞状態を完全に脱しているとは言い難いという考え方ないし感じ方があるからだ。つまり、童貞を喪失したことと童貞性は、別の問題なのだ。

童貞は隠蔽される？

あれこれ考えてきたが、主人公が童貞であることがそうと明記されることは多くない。武者小路の作品のように、一人称の語り手が、自分は性体験がないときっぱり言い切る小説は、むしろ例外的である。作家は、主人公が童貞であると、そのものずばりのひとことでは書かないのが普通なのだ。

童貞は隠蔽されている。そう考えていいのだろうか。作品を読み通してみれば、まず童貞であろうと推測される登場人物が、童貞と記されないのは、隠蔽のためか。それとも、そもそもそう記そうという気が作家にまったく起きないのか。そんな考えはまったく浮かばないのか。だとしたら、無意識のうちに回避しているのか、抑圧しているのか。童貞というひとことによって、作品が矮小化ないし単純化されてしまうということも起こり得ることはあろう。

いずれにしても、童貞と文学は無関係ではない。それどころか、童貞のいない文学史は考えられない。そのことくらいは示しおさせたのではないかと思う。